

やはり俺のボーダー活  
動は間違っていな  
い？？

ちょむすけ、クリス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺ガイルとワールドトリガーのクロスオーバーです。

ワールドトリガーの世界にもし俺ガイルのキャラ達がいたらというありふれたやつ  
です。

八幡無双が恐らくあるので無理な方は見ないことをおすすめします!!

# 目 次

設定

平塚先生からの呼び出し!!

ランク戦スタート

八幡無双最初の犠牲者

V S 風間隊

風間隊との決着

24 19 14 8 4 1



# 設定

設定

比企谷八幡

A級2位冬島隊

ポジション、アタツカ一

メイントリガー、孤月 グラスホッパー バツグワーム メテオラ

サブトリガー、スパイダー テレポーター カメレオン 旋空

16歳 高校2年生 総武高校

好きな物 ボーダーの人達 MAXコーヒー 小町

サイドエフェクト、直感、八幡がふと思つたことが超高確率である。

No. 2アタツカ一

トリオンの扱いが相当上手く、合成弾を1秒かからず作ることが出来る。その高度なトリオン技術を活かし孤月＋スパイダーで「クロステイ」という新しい技を作った。（クロステイは自在に操ることが出来る。）トリオン量は平均のやく2倍。

「クロステイ」

八幡のオリジナルの技、手のひらからキュー<sup>ブ</sup>を出しそこから大量の糸を自在に操り戦う。主に糸を固めて槍や盾を作り出しながら戦う為攻防一体の強さをもつ。

### 「ククリ」

大量の糸を自分を中心に球状に固めて守る技  
メテオラ2、3発なら耐えることが出来る

### 「トープ」

クロステイでやるモールクロー、しかし範囲 威力共にスコーピオンと比べ倍以上ある。

### 「アルミユール」

糸を体に纏い防御力を上げる技

しかし強度はあまりないため全力で攻めたい時のかすり傷防止程度

### 「シユンクラ」

肉眼でぎりぎり見える位の細い糸をばらまき、相手を一気に複数捕らえることの出来る拘束技。ランク戦ではあまり使わない。

ボーダー内での立ち位置（派閥）は特に無く、自分が関わるようなならば自分のやりたいように動く、自分が関わらないようであれば傍観者として気楽にみている。

学校では基本的に俺ガイルの原作通りぼつちだがコミ障というわけではなく一匹狼

だと思われている。そのため1部の女子から結構モテてる。

大規模侵攻のせいで家と両親を無くしたところを小町と一緒にボーダーに保護されそのまま八幡だけでボーダーに入隊したため結構な古株。最初はネイバーを憎んでいたが迅さんから話を聞かされすべてのネイバーが悪いという訳でわないとと思ったため、大規模侵攻で襲つてきたネイバー以外はなんとも思つていらない。

玉狹第一とはボーダーの中でも特に仲が良く、最初は玉狹第一に入ろうと思つていたがレイジさんから「他とも交流を持つた方がいい」と言われ本部でランク戦をしている所を当真さんにスカウトされた。

(その時かはクロステイは使えなかつたが、既にアタッカーとして、そしてその頃はバイパーなども使つていたためシユーターとしても強くなれる期待の新人だつた。)

ヒロインは小南で行くと思います。

# 平塚先生からの呼び出し!!

高校生活をふり返つて2年F組 比企谷八幡

青春とは嘘であり、悪である。

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境全てを肯定的に捉える。

彼らは青春の二文字の前にはどんな一般的な解釈も社会通念さえも捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば嘘も秘密も、もし学校がネイバーによつて壊されたとしてもそれらは全て青春のスペースでしかないのだ。

結局何が起きようと彼らのご都合主義でしかないのだ。

結論青春を謳歌する者達よ

碎け散れ!!

「なあ比企谷、私が授業で出した課題はなんだつたかな?」

放課後、俺は職員室で平塚先生から呼び出しを受けていた。

「はあ、高校生をふり返つてという題名の作文だつたかと」

「ああ！ そうだ。なのになんだこの舐めた作文は」

「俺は割と真面目にかいたつもりですが、事実こういつた人が多い」

「はあ、小僧屁理屈を言うな」

「まあ先生から見たら俺は小僧ですね」

その時俺の顔すれすれを平塚先生の拳が風を切つた。

「次は当てるぞ」

と額に青筋を浮かべながら言つたが俺は顔色一つ変えず

「なら次は避けますね」

と言つた。まあレイジさんと訓練していたんだ、この程度ビビるどころかそのまま力  
ウンターまでできちやうぜ！」

「はあ、そういうえば君はボーダーだつたな」

「そう、俺はボーダーだ。しかもA級2位。てか早く話を終わらせないとつぎのランク  
戦のミーティングに遅れちまうな、

「そうなんですよ、それで今からボーダーで仕事があるんで帰つていいですか？」

「これで勝つた!! 学校側からはこれで何も出来ない。遊びに行くならまだしもこれは  
生活がかかつたバイトという認識になつていてる。

「これならいける!! てか俺のサイドエフェクトがここにいると面倒臭いことになると

つげて いる。まあ 直感 だけ ど、。

「む、そ うか、だ がすこし 質問 に 答え てく れ 5分も かからん」

まあ 5分だけ なら 最悪 5分 経つ ても 終わり そ う になかつたら 無理 やり 帰ろ

「いいで す け ど 5分 以内 で お願い し ま す」

「そ う 言つて るじ ゃ ないか。まあ いい 君 は 友達 は いるか ね？」

なかなか 失礼な こと を ストレー ト で 聞く な。

「まあ い ます てど」

「そ うか、なら ボーダー 以 外 で いるか？」

「うつ、い ない な

「い ない です」

「そ うか、なら 最後 の 質問 だ ボーダー 以 外 で 悩み を 相談 できる 相手 は いるか？」

「ん？ なん の 話 だ？」

「い ませ ん け ど」

「わかつた。なら 相談 し たい 時 は 来い。ボーダー とい う の は ネイバ ー から 町 を 守る とい う 仕事 だ と 聞い て いる が 考え 方 を 変えれば 自衛隊 の ような もの だ と 思う。自衛隊 の 使 う 銃 が トリオ ン？ とか い う やつ 変わつた ぐら いじ ゃ ない の か？ そ こ で 小さ い 時 か ら 育つ て き た と なる と すこし 考え 方 が 大人 びる かも しれん から な。まあ ボーダー 内 で の

問題とかな。時には第三者からの意見が参考になるかもしけん。そういつた時には来い。という事だ話は以上だ、帰つていいぞ」

といいポツケからタバコを取り出し火をつけた。

その仕草が何故かとてもかつこよくみえた。

なんだよ、最初は手が早いだけのクソ教授かと思つたがぜんぜんいい先生じやねーか。手は少し早い気もするが、

「わかりました。そういう時が来たら相談しに来ます」

と言つて頭を下げた。

「ああ、その時はラーメンでも奢つてやろう」

とかつこよく笑つてみせた。

職員室を出た八幡は少し焦つていた

(やばい、今回は新しいスタイルで行く予定だからミーティング遅れたらシャレになら

ん)

と全力で自転車を漕ぐのであつた。

# ランク戦スタート

俺は今A級2位冬島隊作戦室前にきてきた。

(やばい5分遅れた。冬島さんや当真さんも別にそんなに怒らないかもしけんが真木は結構時間に厳しいから怒られるかもしえん。てか遅刻した事ないからなんか入りずらい……)

「おい八幡、お前も遅刻か？」

「やばつ当真さん……ん？ お前も？」

「当真さんもですか？」

「おう。今日やけに眠くてな」

ふううなんか仲間がいると気が楽だな。これが俺がいつも1人だから出来ない『みんなでやれば怖くない』というやつか

「じゃ入りますか」

「おう」

と2人で部屋に入つたが

「2人とも5分遅れてますけどわつてます？」

どうやら真木はキレ気味のようだ

「おいおいたつた5分じゃねーか。そんなキレンなよ。な？」

「ええ、この会議がA級1位が決まるようなランク戦じゃなかつたらすこし反省してもらう程度でしたよ。しかし、今回はA級1位を決めるランク戦で八くんが戦い方を大幅に変えるから大事だと言つたのは当真さんですよね？」

「は、はい、すいません。俺が悪かつたです。許してください。」

と、当真さん。

「で、八くん？ 八くんはもちろん反省してるんだよね??」

「は、はい。この八幡深く反省しています。」

と八幡は誰が見ても完璧な土下座をしていた。

こ、怖ー。ハイライトさん、お願ひ仕事してっ

「まあまあ、反省もしているようだしそろそろ作戦会議始めよう。」

やばい冬島さんの救世主っぷりが輝いてるぜ！

「はあー、わかりました。席についてください作戦会議をはじめますよ

「はい！」

と、俺と当真さんが席について作戦会議がはじまる。

作戦会議が始まつてから2時間

「うし、作戦も決まつたことだし解散。明日に備えて休んどけよー」

「うーす」「分かりましたー」

「明日は4時からだから、遅刻しないでくださいよ」

「はい!!もちろんです!」

「よろしい」

うし、帰つて小町に癒されるとするか。

「じゃ、俺帰りますねー」

「おーう」

「はい、さようなら」

「明日は遅刻すんなよー」

「わかつてますよ、さよならー」

翌日

今はランク戦当日の3時半だ。

えつ、昨日はどうしたつてつ？

小町に癒されたあとすぐ寝たよ、それ以外特にないな。  
まあいい今から最後の作戦チエックだ。

「今日は八幡が動くから、太刀川隊から攻める」

「それじゃ俺今まで動いたことなかつたみたいじやないすか」

「まあいいじやねーか、で俺はできるだけ高台とつて敵が見えたなら撃てばいいんだよな  
？」

「ああそんな感じだ。撃つたら俺が仕掛けたとこにテレポートで逃がす。ま、当真はあ  
んま変わんねーな」

「わかりましたー」

「じやいきますか」

「うす」「おーけー」

「勝つてきてくださいね」

「「「おう」」」

風間 said

「今回もできるだけ冬島隊から狙う。スナイパーは今回当真しか居ないしなにより冬島

さんを野放しにしつゝと冬島隊がやりたい放題になる。この状態なるのは避けたい。」  
「わかりました」

「でも、太刀川隊はほつといていいんですか？」

「いいわけないだろ。できうだけつて話だ」

「その通りだ。あと太刀川に会つたら基本的に逃げろ。一人では奴と戦うことはできるだけ避けたい」

「わかりました」

「いつもどうりやれれば勝てるいくぞ」

「はい！」

太刀川 s a i d

「出水、今回の作戦はー？」

「はあ、しつかりしてくださいよA級1位の隊長なんだから」

「そうですよ、しつかりA級1位の自覚を持つてください」

「うるせー、なんちやつてA級がただの最後確認だ」

「どうだか、作戦どおり冬島隊から狙います。」

「だよなー。ほつとくと1番やつかいな隊だからな。あと唯我、おまえはできるだけ冬

島さんと当真を狙えよ。」

「わかつてますよ。だいたいそれ昨日の会議できまつたことじやないですか」「あり? そしだつたか? まあいい A 級 1 位の実力を見せるとするか」

「はい」

ランク戦スタート

# 八幡無双最初の犠牲者

解説 said

「やあやあみなさんこんにちは、解説役をつとめさせていただきます武富桜子でーす。」

「同じく解説をつとめます東です。」

「同じく解説をつとめる二宮だ」

「よろしくお願ひします」

「よろしく」

「さあいよいよ始まります。今回のランク戦お2人はどう見ますか?」

「注目はやはり冬島隊ですね。今回はスナイパーが当真しかいないということもあって他の2隊から狙われるでしょう。ですのでそこをどう対処するかという所がみどころたねですね。」

「しかも、あそこには比企谷がいる。あいつはボーダーの中でも実力は上の中と言ったところだろう。だがあいつは相当頭がきれる生半可な動きにはならんだろう。逆にそれを他の2隊が柔軟に対処するかと言うのが見どころかもしれん。」

「ほうほう、つまり冬島隊がどう動き、それにどう対応するかと言つた感じですね?」

「まあそうでしよう」

「そうなるだろうな」

「おおつと、いよいよランク戦のスタートです。」

八幡 said

転送されたがまざいな冬島さんと予想以上に離れてる。このままじや冬島さんがやられるな。

『冬島さんあまり目立たないようにしてください。今行きます』

『わかつた。バレない程度に戻はつとくわ。』

『おいおい、俺は1人かよ。まあいいがよ。だがこれじや撃てないぜ。』

『当真さんは予定どうりバレないように高台を目指してください。』

『了解』

(だがこのままだと菊地原とぶつかるかもな。まあその時はやるか。) と、俺はクロスティを一度完成させて孤月の形に戻し鞘におさめた。

菊地原 said

転送された時にマップを見たが冬島さんが冬島隊から孤立していた。

(けどこのままだと多分比企谷先輩が冬島さんの援護に来るな)

『風間さん、こつちに比企谷先輩が近かつたので比企谷先輩をとりにいきますね。』  
『わかった。だが油断するなよ、やつのサイドエフェクトはカメレオンでは少しだが相性が悪い。』

『わかっています。』

(正直比企谷先輩が強いのはわかっているがこのメンツだと少し見劣りするな。)  
と思いつながらも菊地原は八幡の方に近づいていった。

(ん、いた。こちらに警戒している様子はないな。これなら取れる。)

と八幡の背後から首筋を目掛けスコープオノを振るが、

ガキイーン

「なんとなく分かつてたぜ」

と孤月で受け止めていた

「サイドエフェクトですか。先輩のサイドエフェクトなかなかチートですよね。」

とスコープオノを両手に持ち戦闘態勢に入る。

「そもそもねーよ、俺のサイドエフェクトは運などころが多いからな」と八幡も応えるように孤月を構えた。

だが菊地原には少しの違和感があつた。

(なんか孤月の硬さの音じやなかつたぞ?)

「比企谷先輩、孤月に何仕込んだんですか?」

「ああ、そうか。お前のサイドエフェクトは強化聴覚だつたな」と

言い少し笑うと

「これを相手にするボーダーはお前が初めてだ。だから少しデータを取らせてもらう

ぜ」

「クロステイ」

そう言いながら孤月がどんどんほつれていき八幡の手のひらから大量の糸が展開されていった。

「な、なんですかそれ?」

「俺のオリジナルだ」

八幡 said

「な、なんですかそれ?」

クロステイの事だろう

「俺のオリジナルだ」

そう言うと手のひらからでている大量の糸を俺の腕ぐらいの大きさの槍にどんどん固めていき、7本の糸の槍ができていた。

「菊地原、お前はここで仕留める。」

そう言うと7本の槍が菊地原をありとあらゆる角度から攻めるように放つた。

菊地原 said

7本の槍が一気に囮うように飛んできた。だがそれをぎりぎりの所ですべて躱すことが出来た。

(この技はまだ理解出来ていなければ今の比企谷先輩は槍を放つてからか隙がある)と、八幡に向かい突っ込むが

「おい菊地原、うしろ」

何を言つている?と思つ矢先、背中から7本の槍が貫いていた。

「うわ、遠隔操作ありかよ。ヤバイな」

『トリオン供給機関破損ベイルアウト』

A級1位を賭けたランク戦最初に落ちたのは菊地原だつた。

# V S 風間隊

解説 said

「おおつと、ここで比企谷隊員孤月とスパイダーをくつつけた?!そしてそれが孤月の形に戻っていく、あれは何をしているんですか?」

「おそらく、合成弾の応用で作ったものでしよう。しかし難易度が合成弾とは比較になりません。合成弾はあくまで弾と弾の合成です。しかしあれはオプション用トリガーとアタッカー用トリガーです。おそらくあらができるのは比企谷だけでしよう。」

「最後に孤月の形に戻したのは擬態だな。相手は普通の孤月だと想い込む、そこで奇襲かやばくなつた時のためになえて、孤月だけだと思わせるんだろう。だが問題なのはあのトリガーの戦闘力がどれほどかということだ。」

「おそらく、孤月の形を変えながら孤月から糸を出しながら戦うと言つたところでしょう。」

「と、いうことです。これは菊地原隊員との戦いが注目です!!」

「……あれ、めちゃくちや強いじやないですか!! 予想をはるかに超えて います。あの戦い方についてどうおもいます?」

「……正直強すぎますね……。今の戦いでは7本の槍で戦つていましたがもつと複雑な動きが出来るなら非常に恐ろしいです。」

「……あれでもし盾のようなものが出来るのならば、敵の攻撃を守りながら槍で戦うということが出来る。そんな事が出来るのならばアタツカーではまず1人で勝つことが出来なくなるだろう。」

「わ、わかりました。ということでもし比企谷隊員と戦うことがあるようなアタツカーの皆様は十分気をつけてください。」

### 八幡 side

(ふう、とりあえず菊地原はやつたがこれで風間隊には俺のトリガーのことがバレたな、だが正直風間さんさえ警戒しておけば大丈夫だろう。歌川は弱くはないが今の俺なら敵じやねー)

『よくやつた八幡。もうトラップはだいたいできたから俺は隠れる。やばくなつたら言つてくれ。あまり力にはなれんがサポートはする。』

『わかりました』

(うし、残りも頑張るか)

風間 side

『すいません風間さん。』

『いや、初めてのトリガーだ、しかたない。そんなことより情報が欲しい。大体でいい教えてくれ。』

『はい。比企谷先輩のあのトリガーは糸状のトリガーです。おそらくどんな形にも変化可能で硬さは孤月よりすこし脆いぐらいです。あと、遠隔操作ができるタイプみたいですね。』

『よくやつた。それだけで十分だ。歌川。比企谷は2人でやる。1人の時に出会つたら迷わず逃げろ。おそらく俺1人でもきつい。』

『了解。』

（しかしまずいな。このままでは合流しなければ倒せる奴が多すぎる。合流第一で動くか。）

八幡 side

適当に進んでるうちに冬島さんのトラップ地点まで来ちまつたな。

「こら辺をぐるぐる回るか。

と思つてゐるうちになにかが来る気がした。

(たぶん誰か來てるな。ここは様子見で)

「ククリ」

そう呟いたとたん八幡の鞘から大量の糸が手のひらに集まり、そこから周囲を糸が固めていく。

カキイイーン

と鳴り、誰が攻めてきたことが分かつたが既にその時には八幡は糸で固めた壁の中だつた。

風間 side

『比企谷を発見。歌川、あといくらで合流できそうだ?』

『5分もかかりません。』

『わかつた。俺が注意を引く。その間に奇襲で仕留めろ。』

『了解』

(とは言つたが一応奇襲で仕留めるつもりで行く!)  
が、比企谷が「ククリ」と呟いた瞬間比企谷の周りに大量の糸で固められた糸の壁が

現れた。

(なんだこれは。糸の壁? まるで繭だな。)

と、思つているとたん上の糸がほどけそこから比企谷が出てきた。

「風間さんでしたか。1人ですか。でも油断はしませんよ!!」

と同時に比企谷が3本の槍を作り2つの盾のようなものを後ろに纏わせた。

(ちつ、奇襲の警戒か。これでは歌川が上手くきめれん。)

と思いつつも向かつてきました3本の槍を素早く動きながらかわしていた。

『歌川、比企谷が後ろを警戒している。狙うなら斜めから首筋を狙えもしやれなかつたら援護を頼む。』

『了解』

そこから比企谷との激しい戦いが始まつた。

# 風間隊との決着

歌川 side

(そろそろ風間さんの所に着くな。しかし前までの比企谷先輩なら既に風間さんにやられていてもおかしくない。それほど強くなっているということか・・・。)

そして歌川は比企谷の戦いを見て目を見開いた。

(これが比企谷先輩の新しい戦い方・・・。これと初見で戦うのなら菊地原がやられたのもしかたない・・・。この奇襲せめて致命傷だけでも与えないと勝てないかも知れない。) と比企谷の隙をずつと探していた。

そして遂に

(!!。比企谷先輩の首筋が空いた。これならいける!!)

とカメレオンをぎりぎりまで発動させながらスコーピオンで首筋めがけ腕を振った。  
結果・・・

1人の隊員の首が飛んだ。

『トリオン供給機関破損ペイルアウト』  
と歌川が離脱した。

八幡 side

(風間さんにカメレオンを使わせないように糸の槍で攻めてはいるがこのままじやジリ貧だな。だがそろそろだ。)

(・・・くる！・・・3・・・2・・・1)

スペツ

『トリオングッジ機関破損ペイルアウト』

(よし、これで歌川がとんだ)

「何故いま歌川がやられた!?」

「歌川が奇襲で来るのは分かつていました。しかし狙われる場所までは分からなかつた。だから首筋だけ空けておきました。あとは、俺のサイドエフェクトでいつ来るかを大体予想し、そこに鋭くした糸を一本置いておけば歌川が自分で切られに来るつて訳ですよ。」

「・・・そうか、だからあえて糸を固めて戦つていたという訳か、細い糸がバレないよう  
に・・・」

「ええ、ここからは奇襲の心配も無く全力で攻撃に専念することが出来ます。」  
「フツ、これはきついな、だが無傷で帰すつもりは無い。」

「もちろんですよ。」

と、八幡は覆っていた糸のガードを外し6本の槍と1本の孤月を作り上げた。

### 風間 side

(これだけの槍が来るならカメレオンを無理だな。それに比企谷のサイドエフェクトの精度が予想以上に高い。ここからは純粹な攻め方しかできんだろうな。) と思いつつもグラスホッパーを比企谷の周りに若干少なめに置いた。

(変にスピードを上げると奴の糸でやられてしまう。あれはすべてダミーだ。少しでも俺への注意をそらして戦う必要がある。・・・ フツ、さつき純粹な攻め方で行くと思つたがやはり少しだが、からめ手になつてしまふな。・・・ もつとアタツカーブとしての性能を上げねばな)

と思いながらも比企谷が操る糸をかすりはしているが、かわしていた。そして、  
(比企谷が動いた!・ここで決める!)

と比企谷が前に出た瞬間に比企谷の一歩手前にグラスホッパーを置き、比企谷を上に飛ばした。

「やばつ」

と、とっさに迎撃の体制を取るが

「まだ終わらん」

と、さらに比企谷の上にグラスホッパーを置き比企谷が急降下。  
「決める！」

と、スコーピオンを振るうが比企谷が糸で体を引っ張りぎりぎり致命傷は避けた、が  
腕を1本切り落とした。

### 八幡 side

（くそ、やられた。とつさに糸で体を引っ張つてなかつたら首が飛んでた。）

と、思いつつも切られた断面を糸で覆いトリオンがこれ以上漏れるのを防ぐ。

（腕1本で済んだがそれ以上にトリオンの消費がやばいな。今のでだいぶ持つてかれた。）

八幡の「クロステイ」は手のひらから出しているため腕には多くのトリオンが集中し  
ている。そのため腕が1本やられるだけでも戦力がだいぶ減ってしまう。が、

（仕掛けはもう終わつた。あとはかけるだけ・・・）

「お前のサイドエフェクトで躱されるとおもつたが、当たつたか」

「まあ、俺のサイドエフェクトは運が結構絡んできますから・・・」

「だがこれでお前を倒せる希望が見えてきた。お前のサイドエフェクトが発動しなくな

るまで攻め続ければいいということだ

「そんなとこさせませんけどねつ！」

と6本の槍を上から突き刺すように打つが、

「遅い！」

とこちら側にスコープオンを構え突っ込んできた

風間 side

（これで奴の糸は手に持っている孤月だけ……）

と思うが

（!!。なぜ奴は孤月を持っていない!! 一旦引くか?）

と思つていたが

「トープ」

と比企谷がつぶやく。そして地面からモールクローラーの比較にならない大きさの剣が飛び出してきた。

『トリオン供給機関破損ベイルアウト』

（くそ、さつき6本の槍で一気に攻撃したのはこれの布石ということか……）

こうして八幡は一人で風間隊を倒してしまった。